

EPIC 2018
2018.10.09-12



EPICとは

エスノグラフィー学会。
「工業における民族誌的実践会議」
Ethnographic Praxis in Industry

2006年から始まり
2010年に東京で行われたことにより日本で認知された



創始者はケン・アンダーソン（インテル研究者）

AI業界からはじまった
=Google、Microsoft、Adobeなど
AI業界にはUXデザインにお金がついていたため

※その中でもインテルはエスノグラファーを
目指す人々にとって憧れの職場でもあるらしい





エスノグラフィーとは

エスノロジー（民族）
+
グラフ（誌）

エスノグラフィー = 民族誌学

ビジネスアンソロポロジーとも言われる。

文化人類学（アンソロポロジー） =
文化を持つ人間を探求する学問、から派生した



EPIC2018とは

theme 『EVIDENCE』

600人が参加した
(例年の2倍の人が参加)
※ハワイだから？ハワイ大学=文化人類学のメッカ

KEY NOTE × 3
①文化人類学者
②社会学者
③Steel Caseの役員

Paper・Pechakucha・Case study・Panelは自由参加
Salonは事前予約制

開場は3室+ギャラリー1室

合計50件の発表

アカデミア3~4割：プラクティショナー6~7割
参加者はアメリカ人がほとんど。

日本人は井原さん、日立の原さん
JTの女性（導入したいと検討中）+梅中

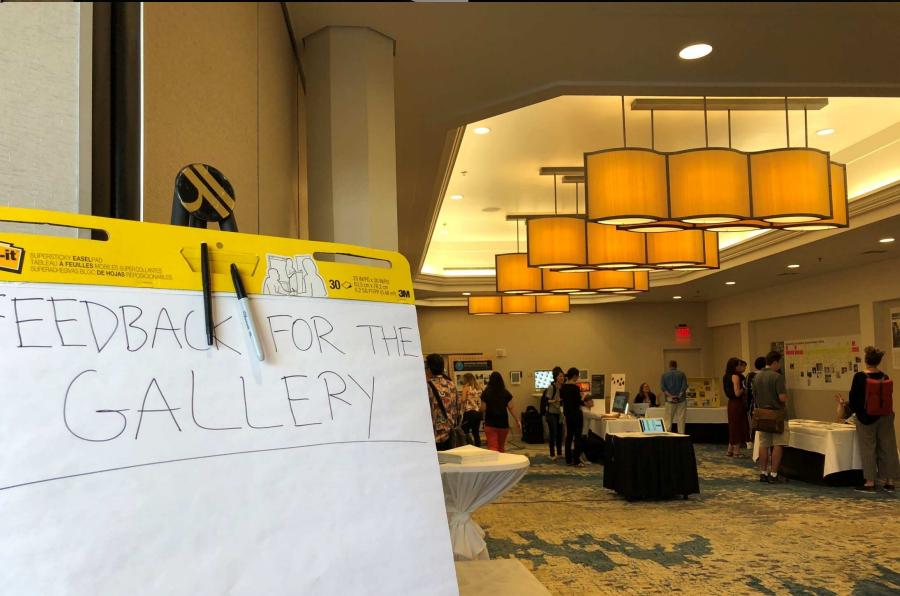
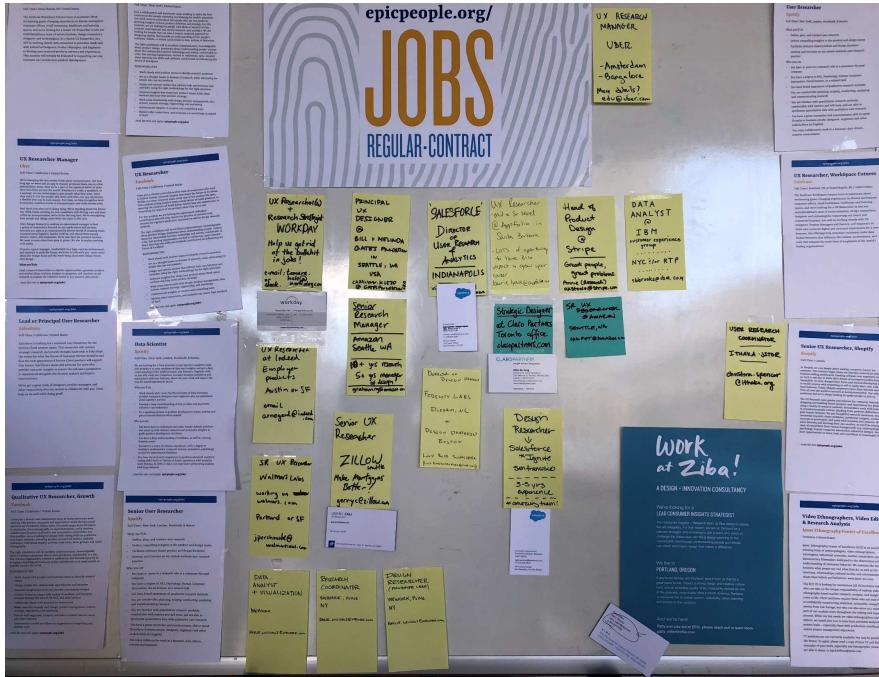
開催場所はアメリカとアメリカ以外の場所を交互
2019年はアメリカ、2020年がメルボルン

※サービスデザインは北欧中心で広がっており
アメリカでは流行っていない？？



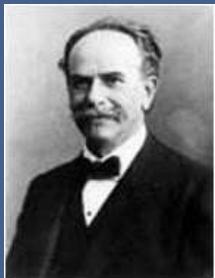








そもそも文化人類学って？ (アンソロポロジー)



エスノグラフィーは
ビジネスアンソロポロジーとも言われる。

文化人類学（アンソロポロジー） =
文化を持つ人間を探求する学問、から派生した

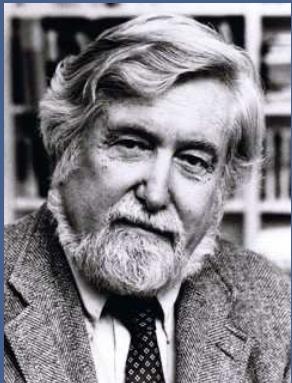
植民地時代以降に広がった
人類学→文化人類学になるきっかけは
1920年代フランツ・ボアズが示した異文化に対する姿勢

文化とは、
物質や具体的な行為の総合体ではなく、
それらを理解可能なものとする
枠組みやルール、記号の体系である
つまり、
「文化」とは人々の理解の仕方に関わっていると捉えた。

さらに、ボアズは「文化」の違いとは、
その進化の度合いによる違いではなく、
その社会の固有性にかかわるものであり
ある文化を他の文化の基準に照らして
「進んでいる」とか「遅れている」と見なしたり、
「高い」「低い」などの判断を下したりすることはできない
と主張した。

異文化に対するこのような姿勢は、
「文化相対主義（Cultural Relativism）」と呼ばれ、
後の人類学の倫理的・認識論的前提となった。

そもそも文化人類学って？ (アンソロポロジー)



クリリフォード・ギアツ
Clifford Geertz, 1926年8月23日 - 2006年10月30日)
アメリカ合衆国の文化人類学の第一人者

インドネシアでの調査を通じて優れた業績をあげるとともに
異文化理解のための独自の解釈人類学を提唱、
広く人文・社会科学に影響を与えた

人類学は「文化」の意味を探求し、
解釈するための学問であると主張した。

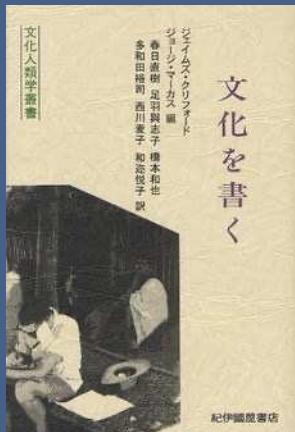
異文化の中に入り、
現地の人々との密接な関係を作り、
広範な「文化」の知識を手に入れて、

「厚い記述(thick description)」
(調査を行っている集団に関するできる限り詳しい記述)
の民族誌を書くことが、
人類学者の仕事であるとした。

1973年の著書『文化の解釈学』で
自身の民族誌記述の方法として提示して有名に

このギアツの主張は、
マリノフスキイ以来のフィールドワークを基に
「民族誌」を書くという作業を基盤としているが、
その目指すものは
「科学的法則」ではなく「解釈学的理解」
であるべきだというものである。

ポストモダン人類学 (1980年代以降)



ギアツの解釈学的「文化」の定義以降、
変化が1980年代以降に現れる。

それはアメリカにおいて、人類学の中心的作業は
民族誌を「書くこと」であるという認識が高まったこと。

その時代の意識を具現化したような本が、
ジェイムズ・クリフォードとマーカス・フィッシャー編
『文化を書く』

民族誌は、あるシステムの様々な特性は、
お互いに関係があり、**単独では必ずしも正確に理解できない**
という考えに基づいた総合的な調査の結果である。

このジャンルは、形式と歴史において
旅行記及び植民地政府の報告書の系譜を引く。

特定の文化、社会もしくは共同体の詳細な報告を提供する。
フィールドワークではたいてい1年以上どこかの社会に入り込み
地元の人間と暮らし、彼らの生活様式を学ぶことが必要である。

民族誌家は、参与観察者である。

彼らは、研究対象である事象に参与することで、
その地域特有の振る舞いや思考を理解する。
消費者と消費について理解するために
民族誌的手法の利用が増加していることで示されるように、
企業もまた、民族誌家が人々がどのように製品と
サービスを使うのかを理解するため、
あるいは新製品の開発のために有効であると気付いている。
新製品の開発に関しては、「デザイン民族誌」と呼ばれる。

現実の経験に対する、
民族誌のシステムатイックで包括的なアプローチは、
言明されない欲求や製品を取り巻く
文化的実践を理解するためにその方法を用いている
製品開発者によって評価されている。

観察の手法 (ネットより引用)

- 日々の振る舞いを直接観察すること。
(参与観察を含む。)
- 異なる堅苦しさのレベルにある人との会話。
(ちょっとしたお喋りから長時間の聞き取りを含む。)
- 系譜学的手法
(民族誌家が図と記号を使って、
親族・相続・婚姻の関係を発見し記録するための一連の手順である。)
- 共同体での生活の一定の範囲について、
重要な相談相手との詳細な作業
- 徹底的な聞き取り調査
- 地域特有の信念と認識の発見
- 問題志向型の調査
- 一つの地域について長期の継続的な研究調査
- チームでの調査
- 事例研究

EVIDENCE OUTSIDE THE FRAME

PhD





Courtesy University College London Archives

マリノフスキとは？



プロニスワフ・カスペル・マリノフスキ

(1884年4月7日 - 1942年5月16日)

ポーランド出身のイギリスの人類学者。

1913年、アボリジニについての文献研究を
『オーストラリア・アボリジニの家族』として発表。

幼少のころからの親友の一人であった
ポーランドの作家とともにオーストラリアを旅行するが、
同年に第一次世界大戦が勃発
イギリスはドイツに宣戦布告した。

オーストリア国籍だったマリノフスキは
イギリス領内で敵国人扱いされ、
出国が不可能となった

(他方でロシア国籍だった親友はすぐに出国を決意し、
ロシア軍に入隊する)。

しかし
パプアニューギニアに行くことは可能であったため、
マリノフスキは最初はマイルー島、
次にニューギニア島東沖にあるトロブリアンド諸島の
フィールドワークに取り掛かる。

こうしてマリノフスキは、
長期にわたって現地の人々と行動を共にし、
その生活の詳細な観察を行うこととなり、
人類学研究に初めて参与観察と呼ばれる
研究手法が導入されることとなった。





エスノグラファーとは

- ・人を対象としていること
- ・確定しないという状況をいかに泳ぎ続けられるか
- ・深さ ≠ 厚み 厚みのあること
(視点の多さ、角度の広さ) が重要
- ・測量点は3点以上であること = 面になる
- ・地味なこと
- ・自分が測定器になること
- ・Judgmentalでないこと
- ・この人が調査したということそのものが
Evidenceであること